

これからの子どもの成長に係わる学童保育の役割

桐生市 澤野 善行

1. はじめに

学童保育とは、夫婦共稼ぎなどの理由から放課後家庭に居ることが出来ない、小学校児童を持つ保護者が、安心して仕事ができるよう児童を預けておくために出来た施設である。私の家庭は夫婦共稼ぎで、同居の母も高齢のため7年前から学童保育にお世話になっている。小学生の子どもを持つ親にとって、最近の子どもがテレビゲームを中心とした、室内での遊び・一人のみの遊びが主になってしまったことに憂える。昔は、どこでもガキ大将がいて子どもの中に縦の社会を作り、その中からルールを覚えていったものだ。私が学童保育に求めたものは、異年齢の子が一つの集団となって遊ぶ中から、得るものがたくさんあるだろうと考えたからだ。私自身、平成12・13年度と父母会の会長として運営に携わり、そこで分かったことや問題点などを見つめ直し、これからの学童保育の果たす役割について考えていきたい。

2. 現代の子どもの実態

(1) 子ども同士で遊ばなくなってしまった要因には、学歴社会に勝つために、塾や習い事などに通い始め、子どもが忙しくなってしまったこと、近所に空き地や自然が無くなったこと、テレビゲームの流行、子どもが外に出なくなったこと等が考えられる。そのため、友達との関わり合い方が分からない子も多い。ニュースでホームレスの人を襲って殺してしまった事件があったが、あれも少年時代にケンカもしたことが無く、こんなことをすれば死んでしまうという程度が分からなかったのではないだろうか。また、陰湿ないじめから自殺に追い込まれる事例にも、相手の立場に立てない風潮が見られる。概して今の子どもは人間関係を作るのが不得意で、会話を好まない。案外、不登校の原因もそんなところにあるのではないだろうか。

(2) 私は、本来子どもというものは友達と遊ぶことが好きで、自然が好きなものだと考えている。私自身、近所の子どもたちと一緒に山に栗拾いに行ったことや、タイヤの浮き輪を使って川下りをしたことは楽しい思い出。しかし、危険だということで禁止になり、残念だった記憶が残っている。今の子どもは、山や川で遊んだ経験が無く、虫や魚がつかめない子どもも多い。泥遊びの経験や木登りもしたことがない、リンゴの皮がむけない等の話には、最近驚かなくなってしまった。しかし、自分の娘が小5の時に(現在小6)マッチをすれないのにはびっくりしてしまった。体験がなかったから仕方がないのだろうが、いささかあわてた。危ないからと、刃物類を使わなくなったために手先の器用さが失われてきたと考えられる。

3. 学童保育での生活

(1) 遊びについて

基本的には、学童保育に預ける子どもは共稼ぎ、母子父子家庭など放課後家に誰もいない、いわゆる留守家庭児童である。子どもたちは学校が終わると「ただいま」と、家に帰るように学童にはいる。そして子どもたちは、気のあったもの同士で遊ぶ。指導員は遊ぶ

の手伝い役として見守っている。私の子どもがお世話になった桐生市ニューたんぼぼクラブの外遊びの内容は、なわとび・Sケン・竹馬・ベーゴマ・かくれんぼ等昔の遊びで、集団で遊ぶものが多い。一方、雨が降ったときなどの室内遊びの内容は、プラバン・あみもの・竹などでの楽器作りなどの他、ケンダマ・かるた・おはじき・トランプ・将棋などを行っている。ここでも一人遊びという場面はない。子どもたちは、集団での遊びの体験の中から様々なルールを学ぶであろう。

(2) おやつについて

学童の保育時間は、放課後から親の勤めが終わり迎えに来る午後6時頃が多いが、場合によっては、多少遅れることもある。おなかですいてしまうので、子どもたちにはおやつを出している。週に一度だけ駄菓子を出す、その他はすべて手作りだ。それもおなかにたまるものということで、おにぎり・うどん・スパゲッティ・むしばん等軽食のものが多い。指導員は調理師も兼ねている。学童によってはスナック菓子等のところも多いらしく、私のところの学童クラブはありがたい。平成13年度から学校の空き教室に入ることが出来、火が使えなくなったが電磁調理器で手作りおやつを食べさせてもらっている。

(3) キャンプについて

夏の行事の一つにキャンプがある。県内の学童の中でも行っているところはいくらだろう。親子キャンプと称して一緒に参加というところが多いと思うが、私たちの学童クラブでは手伝いの親を除いて子どもだけの参加である。それぞれ長所が考えられるが、子どもたちの活動を十分に発揮させたいという指導員の考え方だからだ。キャンプは、楽しいだけでなく、自然と共にいろいろな体験が出来、子どもたちの自覚を促し、子ども同士の仲を親密にさせる大きな効果が期待できる。その中から、「頑張る力」「友達を大切に作る心」「協力しあう精神」が芽生えたら親としてこんなにうれしいことはない。また、母子家庭のためその機会に恵まれない子どもも多いことを考えれば、はずすことの出来ない行事であるだろう。

4. 様々な問題点とこれからの課題

(1) 危機対策について

大阪池田小事件以来、学校の危機管理についていろいろ議論されているが、これといった決め手がないように思われる。特に学童の場合指導員が女性のみのところが多く、心配も大きくなっている。私のところの学童クラブの場合、指導員に防犯ベルを持たせ、防犯灯を一基設置した。その他の対策としては、なるべく近所の人たちの連携を以て不審な人物を見かけたときにはすぐ逃げられるようお願いをした。学校は本来開放的な場所なので、侵入者を絶対に防ぐことは出来ない。私たちの学童保育所は、平成13年度から長年の希望であった学校の空き教室を使わせていただいている。家賃のことや、交通事故の不安から解消されたが、冬のお迎えともなると真っ暗になり、不審者への不安は解消されたわけではない。

(2) 運営について

平成13年度から、区長を中心とした運営委員会の組織が立ち上がり、地域の方々からバックアップをいただきながら、父母会が主体となって活動している。資金面では、各家庭からの保育料、県からの補助金、バザーなどの収益、各種の補助金(昨年度は、日赤募

金からの寄贈があった)などで運営されている。私たちの学童クラブは、今年から児童数が41人になり大規模加算がつき、運営は軌道に乗ってきた感がある。市内の学童でも多いところは、90人以上の児童をかかえているという。指導員の心労も相当のものだ。保育料は、市町村によってまちまちだが、月一万円位前後が多いようだ。家庭によっては、保育料が払えないために入所できない人もいると聞く。どの家庭にも利用しやすい料金になってほしいものだ。

(3) 研修について

学童での生活でも述べたように、毎日異年齢の子どもたちによる共同生活は、大変に意義深いものがあると思う。現在の学童保育は、各学童の指導員の考え方で保育内容を決め、運営されている。私は、遊びの体験を通して得られる様々なものにもう少し着目するべきと考え、各学童で共通した年間指導計画のようなものがあればいいと考えている。そのためには、地域の学童保育所のネットワークを広げることと、行政による研修制度の確立や、指導員同士の研修も必要と考える。

当初は「働く親が安心して預けておける場所」としての学童保育所であったのであるが、子どもと社会を取り巻く環境の変化によって、学童に求められるものも変わっていき、今後の学童に期待したいと思う。

(4) 指導員について

私たちの学童クラブでは、正規職員1名、パート職員3名の4人体制で運営しているが、待遇面で苦慮している。たとえば正規の職員に社会保険をかけてやれない状態だし、パートの職員にも経験に応じた時給を払っているとはいえない状態だ。他の学童の話聞いてみても、劣悪な条件が多いようだ。ただ、救われるのは子どもが好きでこの仕事を続けている人が多いことである。私たち父母も、一生懸命面倒を見てくれる指導員に対して給料なども上げてやりたいが、そのためには、保育料を上げなければならず、ままならない面がある。学童によっては、指導員の離職により新しい指導員の人的確保に頭を痛めているところもあり、出来れば行政による、指導員の待遇面での整備、人的確保、研修制度の確立などの支援が待たれる。

5. これからの学童保育

(1) 長期間で人間関係の基礎を作る場所として

平成14年度から週5日制が始まって、子どもの生活にも定着した感がある。その後の実態はどうか子どもの通っている学校4・5・6年を対象に行ったアンケートでは、休日の子どもの行動は、「家でテレビを見ている」「ゲームをしている」の答え(孤独の遊び)が目立った。ついで「友達と遊ぶ」であったが、外に出て複数の子と遊んでいないところを見ると、外見は友達と一緒にいても、自分の世界での遊びが多くなってしまっている。友達関係を作りたがらない傾向に向かっていると感じているのは、私だけだろうか。学童の特徴の一つとして「毎日行く」という条件があり、そこでは仮に友達との喧嘩等で気まずい関係になっても、次の日にはまた同じ友達と顔をつきあわせなければならず、自分の力でお互いの関係を修復しなければならない。逆に言えば、毎日行くからこそ友達の長所が見えてくる。大変面倒ではあるが、今の子どもたちこそそんな経験を繰り返しながら、成長していくことが必要なのではないだろうか。子どもたちは、少しずつではあるが

お互いを理解し合えるようになってくるのである。

学校のクラスの中には根本に競争原理が潜んでいるため、子どもの中にも一種のランク付けがされてしまい、なかなか全体で仲良くなるのは難しい。学童に入っていない子どもにも、クラスを離れて学年の違う子どもたちが、毎日顔を合わせられる場所(公民館など)を提供し、友達作りの手伝いをする時間が設けられるとしたら、救われる子どもはたくさんいると思う。

(2) 四季を通じて自然とふれあう場所として

群馬県では、ぐんま少年の船という私たち大人が聞いてもうらやましくなるような企画がある。また、各市町村でもアドベンチャー的な催しがある。そういったものに参加できた子どもたちは、自然とのふれあいの中から、様々な得難い体験が出来る。しかし、子どもたちの中には性格上、知らない人たちばかりの中に、一人だけで参加できない子どもが以外と多いのではないだろうか。以前、ビデオで北海道のある学童が紹介されていた。それは男性の指導員と高学年の子どもが助け合いながら、自転車で北海道一周するもので、テント・寝袋などを持ち雨の中を自転車で疾走する姿は感動ものだった。素晴らしいが、長い期間をかけて集団生活から築き上げられた人間関係があるからこそ出来るもので、そうでなければ不可能だと思う。

学校が終わると家でいつも一人になってしまいがちな子どもを、その時だけの企画でなく、年間を通じて自然と関われる環境が出来ないものか。自然の美しさ、素晴らしさと一緒に厳しさの体験を通して、命の大切さと地球環境を守る心が芽生えることだろう。指導員の体制と研修がきちんとなされれば、不可能なことではないだろう。

(3) 地域との関係を広げる場所として

年に一回私たちの地区では「学童祭り」という名で、三つの学童が主催して学童の紹介や、学童での遊びを一緒にしたり、親子が一日楽しく遊べる企画をしている。学童保育という制度がまだ一般に定着していないので、多くの人に知ってもらいたいという願いからだ。チラシを作り全校の児童に知らせるほか、地方の新聞などにも掲載をお願いしている。年々参加者も増えているようだ。また、地域の人たちやお年寄りと交流する機会ができ、見ず知らずのおじいちゃんと将棋を楽しんでいた光景もあった。そこには学童に入っていない子どもや、幼稚園児や保育園児を持つ親たちも集まる。そんな異年齢の集団での遊びの中から育つ大切なものを感じてもらえたらと思う。

今、学校では地域の教育力を活かそうと、各種の企画を通して総合学習等に取り入れている。子ども会や公民館も意識的に様々な企画がされているが、恒常的なものではないため、親しい関係を作るまでには、至っていない。これからの学童は、学校や公民館などで知り合った地域の方々や、お年寄りなどに昔の遊びやボランティアを通じて引き続く関係を持ち、昔の子どもが近所の人たちに注意されていたように、気軽に励ましや注意をもらえる関係が作れるといいだろう。

(4) 心地よい生活の場所(逃げ場)として

少子化のため今の子どもは、一般的に小学校入学時まで、親の他は同学年のみの関わりで育ってくる場合が多い。私は、小学校低学年の間は特に高学年との交流が必要と考えている。低学年の子どもたちは、自分に出来ないことをやってみせる高学年の子どもに、尊敬やあこがれの気持ちが起こるだろうし、高学年の子どもたちは、低学年の子どもを守る

優しさが芽生えるだろう。長く学童で生活をしてくると、少しずつお互いを理解しあえるようになり、やがてそこが子どもたちにとって心地よい場所になってくる。

ある講演会でこんな話を聞いたことがある —— ある日、いったん家に帰った子どもが、学童に忘れ物を取りに来た。どうも様子がおかしいので話を聞いてみると、出がけ母親に「もう帰ってこなくてもいい!」と叱られた。暗くなっている子どもに、学童の指導員の方は、「ただいま~! って、もう一度帰ってごらん。たぶん大丈夫だと思うけど、もしダメだったら私の家に来てもいいよ。」と言ってやったところ、子どもの顔がパーっと明るくな

ったそうだ ——

不安定な状態になったときこそ安堵感を与えることが大切で、放っておくと心の傷になってしまうことがある。この子どもは、指導員の一言で救われた。よくキレル子どもと言うことを聞くが、まわりからのいろいろな要求に逃げ場がなく、頭の中がパニック状態になってしまうのではないか。自分を分かってもらえる場所(心地よい場所)があれば、簡単にキレルことはないであろう。

6. まとめ

今は、モラルのない社会といわれている。少年犯罪の数も後を絶たない。インターネットや携帯電話が普及し、電子メールなどでの交歓が盛んであるが、直接的な人間関係が希薄になっている。一方、陰湿な「いじめ」から自殺に追い込まれたり、自宅に「引きこもり」「不登校」等の問題は深刻だ。特に後者の場合は、心を割って悩みを打ち明けられる友達が居ないことが大きな原因ではないだろうか。人生の中で最も楽しいはずの学校生活が暗いイメージで終わってしまうのは、何とも悲しい。少年時代に、正しい人間関係を持てなかった子どもが増えてくると、恐怖心が起こるのは私だけだろうか。今年の長崎でおきた中学生による「男児殺害事件」は、全国に衝撃を与えた。あの中学生も一人っ子で、学校が終わってもゲームセンターに入り浸っていることが多かったようだ。今時のゲーム機は非常にリアルになって、空想と現実との世界が混同してしまっているのではないだろうか。心の闇の部分の部分を少しでも取り除いてやらなければ、とんでもないことになるのではないか。

学童保育の一番良いところは、小学校に入学してから成績や運動などによって、子どもたち自身がランク付けによる劣等感やプレッシャーから解き放たれ、精神的に自由な形で友達を作れることだろう。そこで、ストレスを解消したり不安感を取り除いたり出来る。親が働いているため、「子どもを安心して預けておける場所」としてスタートした学童保育所であったが、社会における子どもの居場所がなくなってきた今日、学童保育の生活は遊びを通じての異年齢での関わりという点で、かけがえのない場になっている。異年齢の集団の中のみで育つ縦社会の人間関係を、また、自然と遊ぶ機会の多い中から、環境保護を学ぶことは、今の時代極めて大切だと思う。将来、友達との人間関係を大切に、自然の中でのびのびと育った子どもたちが大人になったとき、ひょっとしたら、社会に奇跡を起こせるかもしれない。